

芝神明と宮地芝居

佐 藤 かつら*

はじめに

1. 江戸の宮地芝居
2. 芝神明の宮地芝居と江戸七太夫
3. 境内地の賑わいの中の宮地芝居

おわりに

キーワード 芝神明 宮地芝居 江戸七太夫 境内地 湯島天神 市ヶ谷八幡

はじめに

宮地芝居とは、寺社境内で行われた芝居の呼び名である。宮芝居とも言う。官許の大芝居以外に、歌舞伎を上演する場の一つとして存在した。江戸にも上方にもあったが、上方の宮地芝居は役者の大芝居への修行階梯としても存在し、宮地の役者が大芝居へも出たし、また、歌舞伎芝居興行の官許を得たこともあった¹⁾。それに対して江戸では、手踊、子供手踊、御香具愛敬手踊などの見世物の名目で歌舞伎を上演し、役者も大芝居とは峻別されており、交流はなかった。宮地芝居は小屋の建築や内部の構造にも制限があった²⁾。

しかしながら、江戸の宮地芝居は、大芝居とは異なる立地の利便性と安価な観劇料で人々を楽しませていた。本稿は、芝神明における宮地芝居について、その沿革と実態を追究し、併せて、寺社境内に立地した宮地芝居の娯楽としてのあり方について改めて考えようとするものである。沿革と実態については、さきに拙著『歌舞伎の幕末・明治—小芝居の時代—』（2010年、ぺりかん社）において考察しており、本稿の記述と重なる部分が多い。本稿では、拙著とは視点を変え、時系列をたどって改めて宮地芝居についてまとめなおし、さらにそこからみえてくるものを追究したい。まず、第1節において江戸の宮地芝居の沿革を概観し、第2節において、芝神明の宮地芝居に焦点を絞ってその沿革をまとめる。そして第3節において、芝神明の境内に立地した宮地芝居のあり方について考察する。

* 青山学院大学文学部比較芸術学科准教授

1. 江戸の宮地芝居

まず江戸の宮地芝居の沿革について概観しておきたい。江戸の宮地芝居の発生や展開については、資料があまり多くは残っていないこともあり、不明なことが多い。ただ、守屋穀氏や小笠原恭子氏が指摘したように、江戸時代の初期から寺社境内で芝居興行が行われ、それが官許の大芝居とは格の上で差をつけられていったということは推測できよう。

表1は、江戸の宮地芝居について得られた限りの記録を拾った年表である。前掲『歌舞伎の幕末・明治』に掲げた年表の一部を再掲したもので、幕末までとして、部分的に簡略化している。

表1によれば、江戸の宮地芝居に関する重要な事件としてあげられるのは、正徳4年（1714）の江島・生島事件と、享保20年（1735）10月3日の宮地芝居の興行許可である。正徳4年には、江島・生島事件の余波により宮地芝居の興行が禁止された。一次資料は得られていないが、関根只誠「戯場年表」によれば、このとき興行を禁止されたのは27座の宮芝居であったという。その後、いつ、どのように宮地芝居の再興が許可されたのか。同じく「戯場年表」の享保20年10月3日に、江戸七太夫ほか11ヶ所の宮地芝居の興行人へ、百日間に限って興行が許可されたとある。ほかの記録が見いだせないため、不明な点が多いが、一応、享保20年には再び宮地芝居の興行が許可されたと見ておきたい。

なお、表2にあるように、享保20年時点の宮地芝居として、関根只誠『東都劇場沿革誌料』では12ヶ所が挙げられている。同じ関根只誠による「戯場年表」では17ヶ所が挙げられているのだが、ここではその真偽は追究できない。ともかく享保20年時点では、寺社ごとに複数の興行人がいる場合があったということは言えよう。

享保20年の時点では数多くの宮地芝居が挙げられているが、のちに、宮地芝居の中で有名になるのが、芝神明、湯島天神、市ヶ谷八幡の芝居である。しばしば引く資料であるが、十方庵敬順の「遊歴雜記」（文政元年跋）四編卷之中第貳「市ヶ谷八幡宮社内の都会」を見たい（傍線引用者）⁵⁾。

当社内（引用者注一市ヶ谷八幡）の戯場は、延享年間御免ありて、座元名代を斎藤八尾八と号し、定芝居となりて哥舞妓の狂言たゆる事なし、此因にいはん、芝神明の社内哥舞妓芝居は、寛文の末御免ありて、座元の名代を江戸喜三郎と号し、又湯島天神社内の哥舞妓は、寛延年間御免、則ち座元名代を□□□□（原本欠）と号し、三ヶ処おのへ定芝居にして常に狂言たゆる事なし、是を三座の宮芝居といえり、狂言の仕打芸道の工者、大戯場の俳優におさへ劣らぬ上手もありて、引道具廻り仕懸羅出し羅おろし等の一件、大戯場にかはらずといへど、悲しいかな宮芝居なれば、櫓をアグ上る事なりがたく、及び舞台の破風作り、或は一幕へに狂言の名代役割の替名を読上る事なりがたきは無念にやおもふらめ、左はいへ上棧敷下棧敷土間切落しまで、日々永当へと群集するは、流石に広き東武になん

これによると、市ヶ谷八幡、芝神明、湯島天神の芝居は「三座の宮芝居」と呼ばれたという。またこの三ヶ所は「定芝居」、すなわち常設の芝居小屋であり、役者にも上手な者がいて、引き道具、廻り仕

表1 江戸の小芝居に関する年表

和暦	西暦	事項（出典）
正保2	1645	笠屋三勝が芝神明社内に櫓を上げる。宮芝居の始という（戯344） 江戸七太夫座が芝神明社内に太鼓櫓を上げ定芝居興行（御府内備考続編・市中取締書留 文久十ノ百五十六）
正保3	1646	三勝芝居で女を交え興行、座主入牢（戯344）
慶安3	1650	市ヶ谷八幡社内へ手踊という看板にて小芝居2軒建。大入だが無許可のため取り払い（戯345）
明暦3	1657	9月 都伝内、堺町にてヲドケ手妻・小供手踊り興行、のち神田明神社地へ転座（戯348）
寛文元	1661	10月 新乗物町対馬屋五郎左衛門・鶴屋源太郎願人にて、社地に於て小芝居5ヶ所百ヶ日の間興行許可。筵張晴天興行の旨申渡（一切り手踊、狂言尽くし不可）（東上91・戯349） 12・22 自今堺町葺屋町木挽町五丁目六丁目の外は歌舞伎興行不許可の申渡（戯349）
寛文5	1665	玉川久三郎神田明神社地へ芝居免許。玉川彦十郎の祖か。別人か（戯351）
延宝8	1680	芝神明社でシンカツによる舞、滝山玉之丞の籠拔、七太夫の浄瑠璃ほかの芸能記事あり（家乗）
天和元	1681	中村善五郎葺屋町にて櫓を上げ子供狂言尽しと看板を出す（戯355）
貞享元	1684	芝神明社で松之介・勝女による歌舞伎などの記事あり（家乗）
貞享2	1685	浅草観音境内に虎屋七右衛門芝居建（戯357）七右衛門芝居は子供手おどり或は一幕宛の放狂言にて10年続き、のち自火にて休と元亨記事に見えるという（戯358）
元禄2	1689	芝神明社で七太夫による歌舞伎の記事あり（家乗）
元禄5	1692	9・12芝神明で天満七太夫による歌説経、9・25幸太夫による浄瑠璃操の記事あり（家乗） 鶴屋源太郎、木挽町六丁目で南京操興行（戯360）
元禄10	1697	3・23 湯島で珍斎による放下の記事あり（家乗）
宝永元	1704	12・22 江戸喜太郎ら、芝明神社地にて弥之助芝居興行許可。宝永2年正月2日より4月3日まで90日間。江戸喜太郎（七太夫）への同様の芝居興行許可の記事が宝永7年までみえる（『祠部職掌類聚』巻八「開帳願差免留」）。
宝永4	1707	8月 芝神明社地笠屋万勝四座抱役者の子供、稽古修行のため小芝居2ヶ所願立、興行日数百五十日間許可（神明境内・芝赤羽根北地）（東上150・戯369）笠屋三勝は元禄3年休座、今年万勝願済の上興行、万勝は古三勝の孫（戯369）
宝永5	1708	5・9 宮地その他での芝居興行、今までは無断だったが向後月番の番所へ届け指図を受けることとお触れ（戯370・東上150・市中取締書留 文久十ノ百五十六） このころ東藤蔵、湯島天神の芝居から市村座に出演（『役者大福帳』江戸の巻）
正徳3	1713	初代中島三甫右衛門、湯島天神の芝居から山村座の顔見世に出演（『役者色景図』江戸の巻）
正徳4	1714	◆1月 江島・生島事件、大芝居の山村座廃絶 3月 寺社境内の芝居停止（『御触書寛保集成』寺社之部1188・1189、東上48）宮芝居二十七座停止（戯375）
享保元	1716	◆享保の改革（～延享2（1745））
享保5	1720	芝神明の七太夫芝居は定芝居で大芝居同様に太鼓櫓を上げ興行と木挽町五丁目年寄らが上申（市中取締書留 文久十ノ百五十六）
享保10	1725	江戸七太夫、森田座の顔見世に出演（『役者正月詞』江戸の巻）
享保20	1735	8月 神明歌舞伎座江戸七太夫、山村長太夫跡芝居出願。中村勘三郎が尋ねに応じ七太夫は浅草寺中で子供手踊を菰張で興行と答える。よって宮地は笹櫓と呼び、乞胸に準じた存在であるため不許可（東上176・戯394） 10・3 町奉行大岡越前守より江戸七太夫外11ヶ所興行人へ、以来百日限り興行許可（東上177・戯393）
元文4	1739	この頃広小路にて反魂丹又ははみがきの看板出し、上方浄瑠璃操、能物まね開芝居、小見世物あり。これらを香具師芝居という（東下651）
延享4	1747	2月 火除地とするために明地の床店・見世物がすべて取り払われる。明地にて行ってきた売薬・講談・子供手踊・物真似は寺社境内で興行させるようにと老中より寺社奉行へ指令（『御触書宝暦集成』雑之部1536・1537） 5月 市ヶ谷八幡社内へ斎藤八尾八、三ヶ年の間興行御免（戯403）
寛延2	1749	2月 芝神明社内へ江戸喜太郎歌舞伎芝居興行願い不許可。百日間の芝居興行許可（戯405）
寛延3	1750	湯島天神社内の芝居興行許可、願人笹屋長十郎（御府内備考続編）
明和7	1770	3月 湯島天神社地で土佐操座興行（戯434）
天明7	1787	◆寛政の改革（～寛政5（1793））
寛政3	1791	寺社境内見世物、柿葺板囲で年限を定めた願いは不許可と相談（市中取締類集 香具手踊之部 弘化元・11月寺社奉行書付）

文化6	1809	市ヶ谷八幡境内芝居〈太夫元斎藤八尾八〉へ中役者出勤（伊原敏郎『歌舞伎年表』第5巻）
文化7	1810	市ヶ谷八幡芝居斎藤八尾八、大がかりな興行。三座より訴訟あり（市中取締続類集 操芝居之部）
文政12	1829	7・17 四ッ谷内藤新宿花園稲荷社地にて新芝居興行、三座より訴え（東下421・433・434）
天保12	1841	◆天保の改革（～天保14（1843）） 年末～歌舞伎芝居の移転、大芝居三座、猿若町へ
天保13	1842	2・14 江戸市中の寄席・講釈場213軒のうち15軒を残し、ほかは取りつぶし（藤2-245） 5・21 寺社境内寄席を9ヶ所に限定。これにより江戸市中と合わせ寄席は24軒。神道講釈・心学・軍談講釈・昔咄の他は禁止。寺社境内香具芝居興行禁止、取払い（藤2-269・270） 7・4 三都役者の旅興行禁止（藤2-283・284） 9・6 両国橋広小路での歌舞伎狂言興行を禁止、旅役者は歌舞伎役者弟子となるか渡世替を命じられる（藤2-288・市中取締類集 芝居所替之部）
弘化元	1844	5・6 両国広小路三人兄弟の芝居小屋、棧敷落ちて死者出る（藤2-421・424～425） 12・24 寄席、元の通り営業許可（藤3-232）
弘化2	1845	5月 改革もゆるみ、人形身振咄しの吉田千四が松永町へ出、西川伊三郎・竹本連中、上野広小路三橋亭へ出る（藤2-524） 8・18 より六十日間、小石川白山境内での八幡宮開帳、葭簾張にて人形芝居（藤2-541） 11月 寺社の助成手段として再び境内での見世物を許可。寛政以後の場所を目当てとして、一ヶ年三、四ヶ所を限って許可（市中取締類集 香具手踊之部）
弘化3	1846	4・10より湯島天神境内にて芝居再興（藤3-31） 4・26より深川富ヶ岡八幡宮社内にて「御香具手踊茶番」（藤3-29～30） 5・22 湯島天神・深川富ヶ岡八幡ともに芝居取払い（藤3-31） 12月 猿若三座、香具芝居・寄席での歌舞伎芝居取締願出（市中取締類集 香具手踊之部）
弘化4	1847	7・5 茅場町山王旅所境内にて百日間香具見世子供手踊興行許可、願人南小田原町二丁目家主惣助（市中取締類集 香具手踊之部） 宮地芝居は一時に四ヶ所以下とする。百日以上の日延べ不許可。日延べ等で翌年に持ち越し、数に影響が出たため（安政四年十月、操座の寺社境内芝居願に対する通知、市中取締続類集 操芝居之部）
嘉永元	1848	9・16 小舟町寄席にて歌舞伎狂言上演、取締（藤3-231～232）
嘉永5	1852	閏2月 茶番狂言禁止など寄席渡世取締（市43-423～427） 11・15 深川富ヶ岡八幡宮にて百日間操人形並子供手踊興行、願人深川南松代町代地卯兵衛店清兵衛〈清兵衛は香具師〉（市中取締続類集 操芝居之部）
嘉永6	1853	4月 木挽町采女ヶ原葭簾張場所にて手踊物真似渡世の者、華美の品を用い、風俗に拘わる行いがあったため、取締強化。役者や世話人の名前あり（市中取締類集 市中取締之部）
安政2	1855	◆10・2 安政の大地震、猿若町三座類焼
安政3	1856	操座、寺社境内仮芝居出稼願（市中取締続類集 操芝居之部）
万延元	1860	8・27 猿若町の三座全焼（藤9-370）
万延2 (文久元)	1861	3・16 寄席において茶番・手踊などと唱え歌舞伎類似の興行をすることを禁止（藤9-536）
元治元	1864	4月 西両国橋助成地にて「中島」の芝居再興（明治十二年各座書上）
元治2	1865	3・15 操人形芝居、筋違御門外講武所付町屋敷、米沢町二丁目にての興行許可（藤12-468）
慶応2	1866	3・21 南伝馬町佐野松寄席、御紋服一件（藤13-461） 3・27 猿若町三芝居役者他北奉行所へ呼び出し、猿若町以外への居住禁止等申渡し（藤13-461～463） 3・28 市中寄席にて歌舞伎類似興行禁止の申渡し（藤13-468・469） 4・18 両国橋東詰、幸橋御門外などでの歌舞伎芝居取払い（藤13-508・509）
慶応3	1867	◆10・14 大政奉還
慶応4 (明治元)	1868	◆1・3 戊辰戦争勃発（～明治2・5・18） ◆9・8 明治と改元

注）出典の略号は以下の通りである。

戯＝関根只誠「戲場年表」（芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成 別巻 総合芸能史年表』三一書房、1978年所収）。

「戯」の次に、『日本庶民文化史料集成 別巻 総合芸能史年表』の頁数を記した。

藤＝「藤岡屋日記」。「藤」の次に、三一書房刊行の翻刻の巻数、頁数を（巻数・頁数）のように示した。

東上・東下＝『東都劇場沿革誌料』（国立劇場、1983・1984年）上・下。それぞれ頁数を記した。

「市中取締類集」「市中取締続類集」「市中取締書留」は国立国会図書館所蔵。「家乗」は土田衛（協力 林公子・坂根由規子）「『家乗』芸能記事一覧」（『芸能史研究』84、1984年1月）を参照した。

◆は社会の出来事を示す。

表2 享保20年時点の宮地芝居（『東都劇場沿革誌料』）

寺社	座名	「戯場年表」の記述
芝神明社地	笠屋三勝	
	同三右衛門	
	同万勝	
	江戸七太夫	
湯島天神社地	笹屋長三郎	2ヶ所
市ヶ谷八幡社地	斎藤八尾八	
神田明神社内	都伝内	江戸喜太郎 後神明へ行
浅草寺地中	虎屋七太夫	
赤城明神社地	市川長十郎	
平川天神社地	久松万太郎	
氷川明神社地	金谷三太夫	
	薩摩弥太吉	
		ほか名前不明3ヶ所あり

注）花道・引幕は笹屋長十郎と斎藤八尾八のみ用いるとある。

懸（廻り舞台か）、せりなどの舞台機構も大芝居と変わらない。しかし宮芝居なので、櫓を上げること、あるいは舞台に破風を作ること、一幕ずつ狂言の作品名、役者の役割を読み上げることは許されていない。だが上棧敷、下棧敷、土間、切り落とし、といった観客席に日々多くの観客が集まっている。

この記述はいろいろな点から当時の宮地芝居について教えてくれる。まず、三座の宮芝居の成立年代からみていこう。「遊歴雑記」では、市ヶ谷八幡の斎藤八尾八座は延享年間、芝神明の江戸喜三郎座は寛文末年、湯島天神の芝居は寛延年間に興行を許可されたという。

一方、「寺社書上」（文政10年〔1827〕3月⁶⁾）によれば、市ヶ谷八幡の斎藤八尾八座は「斎藤八尾八家業場小屋」と記され、間口6間、奥行8間で、「延享四卯年六月朔日 大岡越前守殿江願上候処同六日願之通御聞濟ニ相成候、但寺社御奉行所御掛りニ候⁷⁾」とある。また、「御府内備考続編」（文政12年成立⁸⁾）に、湯島天神社内の書上として「売薬香具見世」という記述がある。これは湯島の芝居のことであり、売薬のため見世物を行うということは、しばしば宮地芝居興行の名目としてみられる。この香具見世は間口6間半、奥行8間、持主は笹屋仲五郎で、「寛延三午年人集為愛敬子供躍等仕度段寺社奉行大岡越前守殿江奉願候処、願之通被仰付候、里俗ニ湯島之芝居と申候 願人笹屋長十郎」とある。

図1は「遊歴雑記」に載る宮地芝居の「御免名代懸札」で、櫓の代わりに掲げているのであろうと十方庵敬順は言う。懸札では斎藤八尾八座の興行許可の年が延享4年とあ

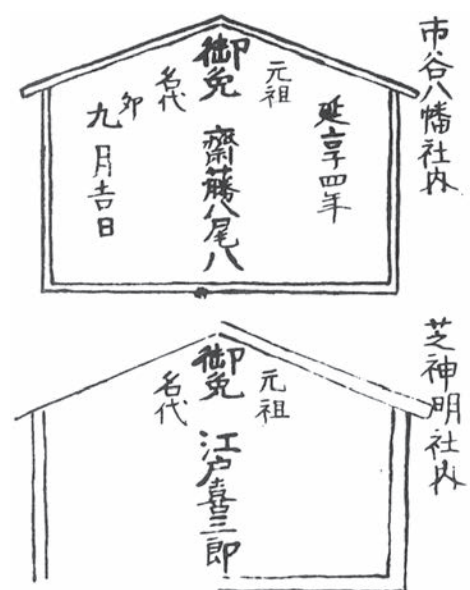


図1 「御免名代懸札」（三弥井書店刊『遊歴雑記』より転載）

る。以上のことから、「遊歴雑記」や「寺社書上」、「御府内備考続編」の記述によれば、市ヶ谷八幡、湯島天神の芝居の許可年代は、記述がほぼ一致しており、それぞれ延享4年、寛延3年と考えられる。残る一ヶ所の芝神明についても、第2節において触れるが、「遊歴雑記」にいう寛文末年に加えて、延享4年に興行を許可されたという資料がある。

これまで表1でみたように、延享4年、寛延3年といった時期よりも以前に、湯島や芝、市ヶ谷においては芝居が存在していた。それが、この延享・寛延ごろに芝居興行が許可されたという記録がみえるのは、なぜなのか。

ここで表1の延享4年2月にある出来事に注目したい。火除地を設けるため、明地で行われてきた売薬・講談・子供手踊・物真似を、寺社境内で興行させるように指令があったという。このとき、推測にすぎないが、寺社境内の芝居についても、あらためて興行許可を願い出るようにといったお触れがあったのではないだろうか。そして、ある種の宮地芝居の再編が行われたのではないだろうか。⁹⁾

延享・寛延年間に、三座の宮芝居と呼ばれる座が改めて興行許可を受けたことは確かであると考えられる。ただし、おおよかに「歌舞伎芝居」の興行ではなく、公的な文書に残る名称としては、「家業場小屋」や「売薬香具見世」であったことも確認しておきたい。

次に、「遊歴雑記」で取り上げられている舞台機構ほかの記述に注目しよう。これによると、三座の宮芝居は、舞台機構は大芝居に劣らず、上下の栈敷、すなわち二階建ての栈敷を観客席として備え、さらに、常設の芝居小屋であるという。しかし、大芝居にある櫓は許可されていない。

櫓は歌舞伎芝居の興行権を表すもので、「売薬香具見世」などを名目とする宮地芝居には設置を許可されないことは明らかである。表1において、芝神明の芝居が櫓あるいは太鼓櫓を上げて興行していたという記述がみられるが（正保2年〔1645〕など）、このことについては後述する。¹⁰⁾

また、常設の小屋という点については、表1にしばしばみえる「百日」「百五十日」といった日数の制限が設けられた興行とは、相反する姿である。

三座の宮芝居に二階建ての小屋があったことや歌舞伎同様の興行をしていたことについては、天保改革時の資料からも確認できる。¹¹⁾ この資料も拙著においてすでに掲げたものだが、天保の改革で寺社境内の芝居などが取り払われた後、当時寺社奉行であった松平和泉守が、弘化元年（1844）、寺社境内の見世物の取り計らいについて老中に提出した文書の一部である。寺社境内の寄席を9ヶ所に減らしたことを述べた後、以下のように続く（傍線引用者）。

右九ヶ所之寄場江申渡候砌、湯島天神、市ヶ谷八幡、芝明神境内、^(ママ)延享度葭簀圀日除同様二而、売薬弘之ため操子供仕形物真似等之願濟ニ候処、いつとなく歌舞伎芝居同様之渡世いたし、板圀二階栈敷者勿論、最寄茶屋々より弁当酒食持運び候様成行、殊ニ湯島等江者其砌三芝居与も堺町葺屋町共引払之義ニ付、相休居、右芝居座之ものも罷出、見物人群集いたし、尤神明者戊年及大破、置置候趣有之候得共、願濟ニ振レ不取締ニ付、三ヶ所共不残為取払候義ニ而（略）

これによれば、三座の宮芝居は、もともと延享年間に葭簀圀の小屋で、売薬弘めのため、操や子供仕形物真似をするものとして興行許可を受けたのにもかかわらず、いつのまにか歌舞伎芝居と同様の興行

を行い、板囲の小屋で二階棧敷まで作り、最寄りの茶屋から弁当や酒などまで運ばせていたという。これは「遊歴雑記」の記述に合致する。三座の宮芝居が大がかりで、かつ恒常的な興行を行っていたことがうかがえる。さらに天保改革当時、湯島天神の芝居には、改革で猿若町への移転が決まり休んでいた大芝居からも役者が出演していたとある。堺町は中村座、葺屋町は市村座があった地である。湯島天神の芝居は大芝居の代わりともなるような興行であったことが確認できる。なお、こうした状態はもともとの出願と相違しており、湯島天神、市ヶ谷八幡、芝神明三ヶ所の宮地芝居とも、天保改革で取り払われることになった。宮地芝居は、葺簀囲の仮設の形をとった時期もあったし、取締の厳しくないときには板囲の常設の形にしたときもあった、と考える。つまり、その時々によってその姿は異っていたと考える。

上の文書で確認しておきたいのは、芝神明の芝居小屋が、「戊辰」に大破し、天保改革時には興行を行っていなかったことである。「戊辰」は年代を考えると天保9年（1838）かと思われる。

この文書の続きについては拙著でまとめており、ここでは詳述しないが、その趣旨は、天保の改革で寺社境内の見世物全てが取り払われてしまい、寺社の助成となる手段が失われたので、見世物を再び許可したいというものである。この中で、宮地芝居となり得る見世物については必ず出願の上興行することとし、柿葺板囲の小屋は禁じ、興行日数を限り、乞胸頭の配下としてその生業を行うものと規定された。乞胸とは、身分は町方に属し、家業は乞胸頭仁太夫、および仁太夫を通じて非人頭車善七の支配を受けるもので、大道や寺社境内で芸能を行った人々のことを指す。この文書に対しては翌弘化2年（1845）老中からの指令を受け、寺社境内の宮地芝居が再び興行を許可される可能性が生まれた。¹²⁾

天保改革後は、三座の宮芝居のうちでは、現在のところ湯島天神社内の芝居しか興行記録を見出していない。市ヶ谷八幡、芝神明の宮地芝居はどうなったのか。この点は不明なのであるが、十方庵の見た文政ごろから天保改革直前まで、三座の宮芝居は、江戸の宮地芝居の代表格として盛んな興行を行っていたといえよう。¹³⁾

2. 芝神明の宮地芝居と江戸七太夫

前節で述べたように、芝神明には、笠屋三勝や江戸七太夫など複数の座が存在していた。ここでは江戸七太夫に焦点を絞りたい。その理由は、現在、芝神明の宮地芝居の沿革を知ることができる資料としては、江戸七太夫のものしか得られていないということがある。

ここで、江戸七太夫の名前について確認しておきたい。前節「遊歴雑記」には、芝神明の宮地芝居の座元として江戸喜三郎の名前が挙がっていた。表2では、「戯場年表」の記述で神田明神の芝居として江戸喜太郎の名前があり、のちに神明に行く、とある。これらは別の人物なのだろうか。

国立公文書館所蔵「祠部職掌類聚」巻八「開帳願差免留」には、元禄～享保頃の宮地芝居の興行願が残されており、その中に、芝神明社地における「弥之助芝居」の出願が宝永元年から7年（1704-10）まで13例みえる。¹⁴⁾たとえば次のようなものである。

芝居座元江戸

喜太郎

権三郎

山三郎

於芝神明社地弥之助芝居興行仕度之由讃岐守方江願出候ニ付申十二月廿二日願之通申付来酉正月二日より同四月三日迄日数九十日差免候旨証文申付之

ここでの「申」は宝永元年（1704）と考えられる。「弥之助芝居」については未詳だが、通常の歌舞伎芝居とは異なるものであろう。13例のそれぞれの出願人は微妙に異なるが、全てを挙げると、江戸喜太郎、権三郎、山三郎、七太夫である。このうち、権三郎には「世話役」と肩書きのついている願書がある。また、次のような願書がある。

一

芝神明社地

喜太郎事

七太夫

弥之助芝居当正月迄差免候之处跡芝居相願候ニ付当寅七月迄指免旨正月廿七日於内寄合弾正小弼申渡之

上の願書の「寅」は宝永7年（1710）である。「喜太郎事七太夫」とある。この願書だけにみえる記述だが、このことに基づき、喜太郎と七太夫は同一人物と考えたい。また、「遊歴雑記」にみえる江戸喜三郎は、現在のところ、同書にしか見出していない名前である。「遊歴雑記」における誤記かと考えるが、確定はできない。

それでは、江戸七太夫座の沿革を記す資料、すなわち「御府内備考続編」に載る江戸七太夫座の沿革と、文久元年（1861）に江戸七太夫（喜太郎）が芝神明での宮地芝居再興を願い出た文書¹⁵⁾をみていこう。前者は文政十年に、江戸七太夫自身により座の由緒が語られたもの。後者は、文久元年時点の江戸七太夫（喜太郎）が、改めて興行の許可を願い出たときの文書に書かれた座の沿革と付属の資料である。表3はこの二種の資料をもとに作成したものである。文久元年の願書では、文久元年時点の江戸七太夫（喜太郎）の曾祖父のことから書かれているので、曾祖父を喜太郎(1)、祖父を喜太郎(2)、父を喜太郎(3)、願い出た喜太郎を喜太郎(4)とした。なお、表1にも表3に掲げた情報が重複して記されていることがある。¹⁶⁾

この二種の資料には異同もあるが、ここからわかることは、まず、正保2年（1645）という年代に、太鼓櫓を上げて定芝居興行を始めた、と江戸七太夫が主張していることである。沿革の最初から、正当な興行権を得て歌舞伎芝居を常設で興行したと主張しているのである。大芝居の中で最も古いとされる中村座の興行の始まりは、その由緒書では寛永元年（1624）といい（『東都劇場沿革誌料』）、江戸七太夫の芝居はそれより下るが、劣らず古い由緒を持つと主張されている。

一方で、さきに見たように、宝永年間、江戸七太夫は「弥之助芝居」という、通常の歌舞伎芝居と同

表3 江戸七太夫芝居の沿革

年・月・日	和暦	記録	典拠
1645	正保2	太鼓櫓を上げ定芝居興行	備考・文久
1671・6	寛文11	芝居に対する改めがある	文久
1671	寛文11	戸田伊賀守の吟味により、定芝居の許可を得る	備考
1689	元禄2	諸所の芝居が取り払われたが江戸七太夫座は大芝居三座同様興行を許される	備考・文久
1714	正徳4	宮地芝居取払に付き江戸七太夫も引き払い、町住	備考
1714・4・29	正徳4	町奉行松野壱岐守へ興行を出願	備考
1718・6	享保3	寺社奉行松平対馬守へ興行を出願	備考
1719・7・9	享保4	町年寄奈良屋市右衛門に呼び出され願書を作成	備考
1720・12・8	享保5	町年寄樽屋藤右衛門方へ木挽町・堺町・葺屋町名主らが呼び出され、七太夫芝居が「其外々宮地草芝居」とは異なり、古来より太鼓櫓を上げ数年来興行していることを見聞していると証言	備考（・文久）
1747	延享4	太鼓櫓の許可を得て興行すべきところ、さしあたり座元そのほかのものが困窮しているので、「売薬相弘め」として「手妻からくり子供踊りいほり看板」を願い出て許可	備考
1750・8・17	寛延3	芝神明社地江戸喜太郎が太鼓櫓を上げて興行したいと出願したのに対し大芝居三座は許可しないよう願い出る	文久
1751-1763	宝暦年中	興行を続けられず休座、また願い出て許可を得る	備考
?	?	興行を続けられず休座	備考
1767・7・18	明和4	久世出雲守らに興行を出願（許可については不明）	備考
?	?	喜太郎(1)が病気で休座	文久
1781・8	天明1	興行を許可される（「文久」では8月にしる願、10月に許可）	備考・文久
1824・1・5	文政7	芝居小屋より出火し休座、この時の座元は喜太郎(2)	備考・文久
1830・9・2(6)	文政13 (天保1)	興行を許可される	文久
?	?	小屋が破損	文久
1837・3	天保8	願い出て小屋を取り崩し畳む	文久
1849・4	嘉永2	喜太郎(3)が興行再開を願い出るが不許可	文久
1850・2	嘉永3	畳んで置いた小屋が類焼	文久
1861・1・26	万延2 (文久1)	喜太郎(4)が興行再開を願い出る	文久

注) 典拠は、「備考」で「御府内備考続編」を、「文久」で文久元年の願書を表した。また、文久元年の願書において、1861年時点の江戸喜太郎を喜太郎(4)とし、その曾祖父を喜太郎(1)、祖父を喜太郎(2)、父を喜太郎(3)とした。なお、喜太郎(1)の休座の時期が不明であるが、表では仮に入れておいた。

じとは考えにくい名称の興行を出願しているもので、七太夫の主張の実態は不明である。ただ、江戸七太夫としては、正当な歌舞伎芝居の興行権を得ているという主張を江戸時代を通して行っていることが、表3からわかる。

また、江戸七太夫に、実際に何らかの興行権があったことがうかがえる資料がある。これも拙著で引いているものであるが、役者評判記『役者正月詞』江戸の巻（享保11〔1726〕1月刊）である。七太夫は正徳4年の宮地芝居の取り払い後、享保10年の森田座の顔見世興行に出演していたことがわかる（口

絵12参照)。立役の部で、位付けは「上上士」(士は「吉」の一部)である。

芝神明社地にての、名題をもつた、年来の大夫本。此度初て此座へ実形にておつとめ、(中略)顔みせ口上、私義は御存知の芝神明の大夫本、十二三年いぜんに、ふとらうにん仕り、こゝかしことへめぐり、渡世仕りましたが、当大夫本とは、ゆいしよもござります故、此度すけよと申さるゝを、渡りにふねと悦び罷出ました。(傍線引用者)¹⁷⁾

傍線の「名題」を「名代」、すなわち興行権と考えると、江戸七太夫は長年芝神明社地における興行権をもった「大夫本」(太夫元、座元)であるという。そして、享保10年より12、3年以前、すなわち正徳4、5年(1714、1715)ごろ、浪人し、そこかしこで渡世を行ってきたとある。正徳4年に宮地芝居が取り払われたために、江戸七太夫が興行を出来なくなったことが明らかである。表3を見ると、享保10年に大芝居に出るまでに、七太夫は何度も興行の再開を願い出ている。それがかなわなかったため、関係のある「当大夫本」、すなわち森田座の座元に誘われ、森田座に出演したというのである。

大芝居の森田座と、宮地芝居の江戸七太夫座とに関係があったという点も非常に面白いが、ここでは措く。この評判記の記述から、江戸七太夫は芝神明社地での興行権をもった座元であり、役者でもあったということがわかる。江戸七太夫は、このあと享保15年度までは大芝居に出演しているが、その後の消息は不明である。宮地芝居の役者が大芝居に出演した例は江戸では珍しいのだが、江戸七太夫の出演時期の前にも宮地芝居から大芝居に出演した役者がおり(表4)、この時期には江戸でも宮地から大芝居へという流れがあったことが確認できる。

さて、表3に戻ると、江戸七太夫は興行権を主張しながらも、何度も挫折し、延享4年(1747)に「売薬」のために「手妻からくり子供踊り」を興行するとして、興行を許可された。延享4年という時期の意味については、前節で触れた通りである。表3によると、江戸七太夫は興行許可と休座を繰り返しながら幕末に至っている。前節で天保9年(1838)に小屋が破損したことは確認したが、そのことは表3では天保8年の箇所記述されている。天保改革直前にこのような事態に陥り、以後、しばらく興行はされなかった。その後嘉永2年(1849)に至って再び興行を願い出るが不許可、文久元年の出願に至るのである。文久元年の出願がどうなったか不明だが、それまでの経緯からすると、興行を許可されたとは考えにくい。

ここで確認できるのは、幕末に至るまで、江戸七太夫の名前を継承し、由緒を主張して宮地芝居の興行の許可を得ようとした人物がいたことである。実際に血縁関係であったかどうかは不明であるが、名前が受け継がれており、一つの正統が主張されていたことが重要である。

芝神明社において興行権を持っていた江戸七太夫の座が、幾度も興行に挫折し、興行再開をめぐって幕府とのせめぎ合いを経ながら存在していたことがわかる。十方庵が見たように、興行が順調で大がかりで盛大だった時期もあった。しかし江戸七太夫座の興行は江戸時代を通して恒常的なものではなく、苦しい道をたどるものであったことが、表3からわかるのである。

表4 宮地芝居から大芝居へ出演した役者

役者名（役柄）	出身	出演した大芝居	典拠	備考
東藤蔵 （道外方）	湯島天神の芝居	市村座・山村座	宝永8年3月『役者大福帳』	
藤岡大吉 （若女方）	一谷八幡の芝居・ 一谷の天神さま神 明の芝居	森田座・市村座・ 中村座	宝永8年3月『役者大福帳』・ 正徳4年2月『役者色景図』・ 正徳6年1月『役者願紐解』	前名伊藤六三郎（『役者願紐解』）。
尾上定之助 （若女方）	一谷八幡の芝居	森田座	宝永8年3月『役者大福帳』	
市川団三郎 （立役）	宮芝居	森田座	正徳2年3月『役者箱伝受』	団蔵弟市川百松。
三條勘太郎 （若衆方）	芝の神明	山村座・中村座	正徳2年3月『役者箱伝受』・ 正徳5年1月『役者返魂香』	
市川団五郎 （立役）	湯島天神 生島小 吉座	山村座	正徳3年4月『役者座振舞』	市川団十郎の世話で山村座出演
鎌倉半三郎 （立役）	一谷八幡・神明江 戸七大夫座	森田座・市村座	正徳3年4月『役者座振舞』・ 正徳4年1月『役者目利講』	鎌倉長九郎次男、山中平四郎弟。 一谷八幡・神明江戸七大夫座の大 立物（『役者座振舞』）。
西国兵三郎 （道外方）	湯島天神	森田座	正徳4年1月『役者目利講』・ 同年2月『役者色景図』	「大しばる中絶にて、近年あがき の明神宮しばるへ出られ。当顔み せより本ぶたい久／＼での出初め でたし」（『役者目利講』）。「あが きの」は赤城の明神芝居か。
市川勝五郎 （立役）	宮芝居	大坂・篠塚座	正徳4年1月『役者目利講』	
中島三保右衛門 （三甫右衛門） （敵役・実悪）	湯島天神ノ芝居	山村座ほか	正徳4年2月『役者色景図』・ 正徳5年1月『役者懷世帯』ほか	前名中島勘四郎（『役者色景図』）。 中島勘左衛門の「直弟（じきてい）」 （享保11年1月『役者正月詞』）。 また中島亀之介とも（笹屋長十郎 布袋や市右衛門芝居興行の時。宝 暦4年3月『役者大峰入』）。
鈴木半弥 （若女方）	市谷の八幡	山村座	正徳4年2月『役者色景図』	
鶴屋源蔵 （立役）	湯島天神芝居	市村座	正徳5年1月『役者懷世帯』・ 同年同月『役者返魂香』	「宮しばるのあら事しのたて物」、 市村座の南北孫太の息子（『役者 返魂香』）。
早川伝四郎 （立役）	湯島天神芝居	市村座	正徳5年1月『役者懷世帯』・ 享保11年1月『役者正月詞』	
若林四郎五郎 （立役）	湯島天神のしばる	市村座	正徳5年1月『役者返魂香』・ 正徳6年1月『役者我身宝』	前名志賀庄三郎。
花染八橋 （若女方）	宮芝居	大坂・岩井座	正徳6年1月『役者我身宝』	
姉川仙左衛門 （立役）	湯島座	森田座	享保8年1月『役者春空酒』	前名竹島。
大谷龍左衛門 （敵役）	湯島	中村座	享保11年1月『役者正月詞』	
江戸七大夫 （七太夫） （立役）	芝神明社地	森田座	享保11年1月『役者正月詞』・享保 11年3月『役者拳相撲』・享保13年 1月『役者遊見始』・享保13年2月 『役者評判一の富』・享保13年3月 『役者色紙子』・享保14年1月『役 者登志男』・享保14年3月『役者二 和桜』・享保15年1月『役者美男 尽』・享保17年1月『役者春子満』 ※実際には出勤せず・享保18年頃 『役者芸加賃』（京）※実際には出 勤せず	

注）役者評判記の引用は『歌舞伎評判記集成』による。

3. 境内地の賑わいの中の宮地芝居

最後に、境内地の賑わいの描写にみえる宮地芝居の姿について追ってみたい。

まず、「遊歴雑記」のうち、芝神明社についての記述をみる（貳拾七）。これは、例年9月11日から21日までの例祭に伴う生姜市の賑わいについての部分である。

此市の間都鄙の男女山をなして群集し、軒ならびの茶店も膝を容る場席もなく、又は吹矢の人形に立集ひ、^{シバイ}戯場軽業曲持の門^{カド}へは押合て往来も留^{トマ}り、その外居合拔、独楽まはし、白鼠^{イフコトキ、ワケ}の言事聞分て札をくわへる、猿のしどけなき狂言、又は豆蔵がから口咄^{ヲトガイ}しに頤^{ハツ}を逃して立集ふ一様ならぬ浮助が人ごろも

ここには、「戯場」すなわち宮地芝居に加え、茶店・吹矢・軽業・曲持・居合抜き・独楽回し・白鼠の見世物・猿芝居・豆蔵といった、人々を引きつける娯楽が記載されている。このうち、吹矢とは、筒に矢を入れ勢いよく息を吹き込んで矢を飛ばし、からくり的に命中させると人形が飛び出してくるというものである。¹⁸⁾同じく「遊歴雑記」を見ると、湯島天神、市ヶ谷八幡についても、人々を魅了する娯楽として次のものが挙がる。すなわち湯島は上野方面を一望できる眺望・茶店・楊弓・吹矢・伊東燕晋（講釈）・巫女の舞・男娼（陰間）・長太夫の戯場・松がね屋（松金屋、料亭¹⁹⁾）。市ヶ谷八幡は、戯場・吹矢・土弓・軍書よみ（講釈）・水茶屋よりの眺望・小間物人形店。

湯島と市ヶ谷にあって、芝神明に書かれていない娯楽としては眺望・楊弓（土弓）・講釈などがあるが、宮地芝居や吹矢・茶店といったものは共通している。楊弓は矢を射て的に当てる遊びだが、その遊びをさせる場所を矢場とも言い、若い女性が矢を取って客に渡すなどして、客を魅了した（口絵13『絵本時世粧』²⁰⁾参照）。図2は大坂の天王寺付近を描いたものだが、境内地と、楊弓場、水茶屋が立ちならぶ様子が描かれ、芝神明などのにぎわいもこのようなものだったかと想像される。²¹⁾

芝神明でも楊弓は有名だった。²²⁾竹柴其水作『神明恵和合取組』（参考「め組の喧嘩」口絵15）という歌舞伎狂言がある（明治23年〔1890〕年初演）。これは、現在でも時に上演される演目で、文化2年（1805）2月、芝神明で行われていた花相撲の七日目が終わった後、境内の香具芝居の小屋において町火消め組の辰五郎らと、相撲取九龍山^{とびら}扉平らとが争いとなり、ついには双方に死傷者を出したという事件を題材とする芝居である。この芝居では、文化2年当時の芝神明の境内地を舞台で再現することに注意が払われている。第二幕目に芝神明の芝居小屋前の場面があり、²³⁾ここで喧嘩が起こって、その仲裁に座元の江戸喜太郎も登場するのであるが、喧嘩の場面の前に、芝神明の賑わいが描写されている。まず、芝居の出方新太と、茶屋の娘おまつ・およしとが芝神明の賑わいについて話をしている中で次のようなものがある。

茶屋娘 おまつ けふはお角力の顔ぶれがいゝので、大そうな見物でござんしたが、お客が違ふとはいふものの、こぼれが大分芝居へ来たぞえ。



図2 境内・楊弓場・水茶屋（『大通人狐幸』文化9年〔1812〕より 国立国会図書館所蔵）

茶屋娘 およし そりやア見物の来るはずさ、御殿場の宙乗りなどは木挽町の芝居でもかなはないくらゐだとこの近所の評判でござんす。

新太 何でも氏子繁昌でなければ、互ひにいけないが、まづ宮内でも芝居と角力、楊弓店に吹矢にからくり、食物店は大々餅、明神さまのおさい銭から、日蔭町の商人と、其うるほひは大したものだ。

まつ ア、モシ―、そんなにならべたてなくても、わたしやア芝の産れだから、よく知つてゐますわいな。

ここでは、芝神明の宮地芝居における御殿場の宙乗り（『義経千本桜』四段目の狐忠信の宙乗り）は、木挽町の芝居、つまり大芝居の森田座もかなわないうらだと、茶屋娘が自慢している。さらに、芝神明の娯楽として、芝居以外にも、相撲・楊弓・吹矢・からくりなどが並べられている。

さきに引いた「遊歴雑記」では、湯島の箇所「陰間」が挙がっていたが、芝神明前にも陰間茶屋があったことは有名で、「め組の喧嘩」には客である武士と僧侶と共に宮地芝居を見物にやってきた陰間も描写されている。そして、やはり芝居の出方が、「今江戸中で子供屋流行、湯島よし町八丁堀と、神明前の七軒町だが、この四ヶ所の其うちでも、芝が一番美しい」と自慢をするのである。子供屋とは陰間を抱えておく店のことである。

芝居における描写が全て真実だとは言えないが、「め組の喧嘩」第二幕目では、芝神明前に集い、そ

それぞれの娯楽を楽しむ人々が具体的にいきいきと描かれている。喧嘩の当事者となっため組の頭辰五郎の妻子（おだいと喜太郎）とめ組の文次もやってきて、茶屋娘と次のような会話を交わす。

まつ 今日はどちらへ、お出かけでござります。

だい 少しかゞふことがあつて、灯笼仏さまへ行つたかへりがけ、いつもきまりで宮の内で吹矢を見るのでござんすよ。

まつ オヤ吹矢でござりますかえ。どこにもござりますさうなが、神明さまのが昔から相かはらずだと申します。

文次 姉さん芝居は這入りますかね。

よし 毎日大入でござりますのに、只今方角力がはねましたから、それからまた込みますので客留^{きやくどめ}になりました。

おだいのせりふに見られるように、境内地における娯楽も人々を引きつけるものであったが、本来的には、人々は寺社の参詣にやってくるのであった。もちろん参詣が二の次で、娯楽だけが目当ての者もいたであろうが、寺社境内という場所に集う人々の目的として、参詣ははずせない要素である。

宮地芝居は、参詣の対象としての寺社そのもの、ならびに眺望といった自然の要素、楊弓・吹矢・相撲・講釈などのさまざまな娯楽の中の一つとしても存在していたことが、これらの資料からうかがえる。図3～5は、『江戸名所図会』（天保5-7年刊 [1834-36]）に描かれた、芝神明、湯島天神、市ヶ

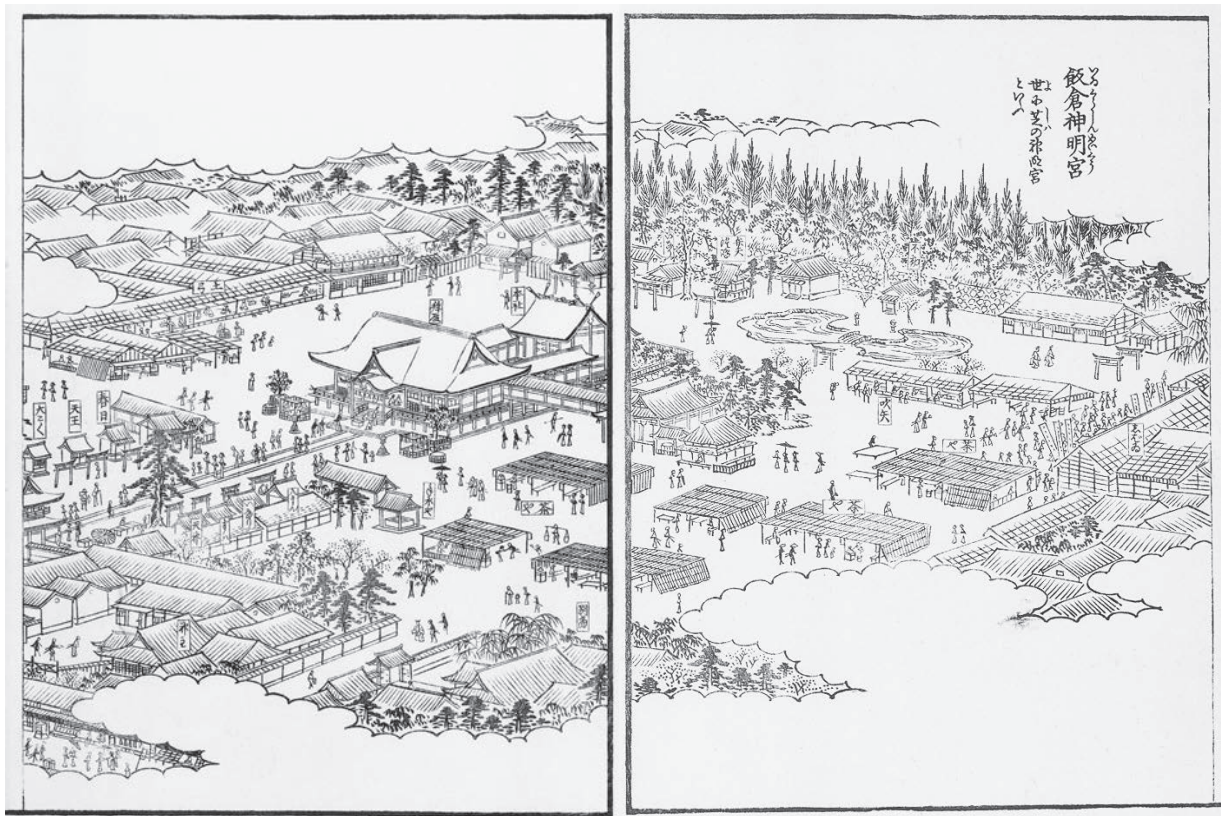


図3 飯倉神明宮（芝神明）（『江戸名所図会 三』東京都江戸東京博物館所蔵 資料番号91211456）

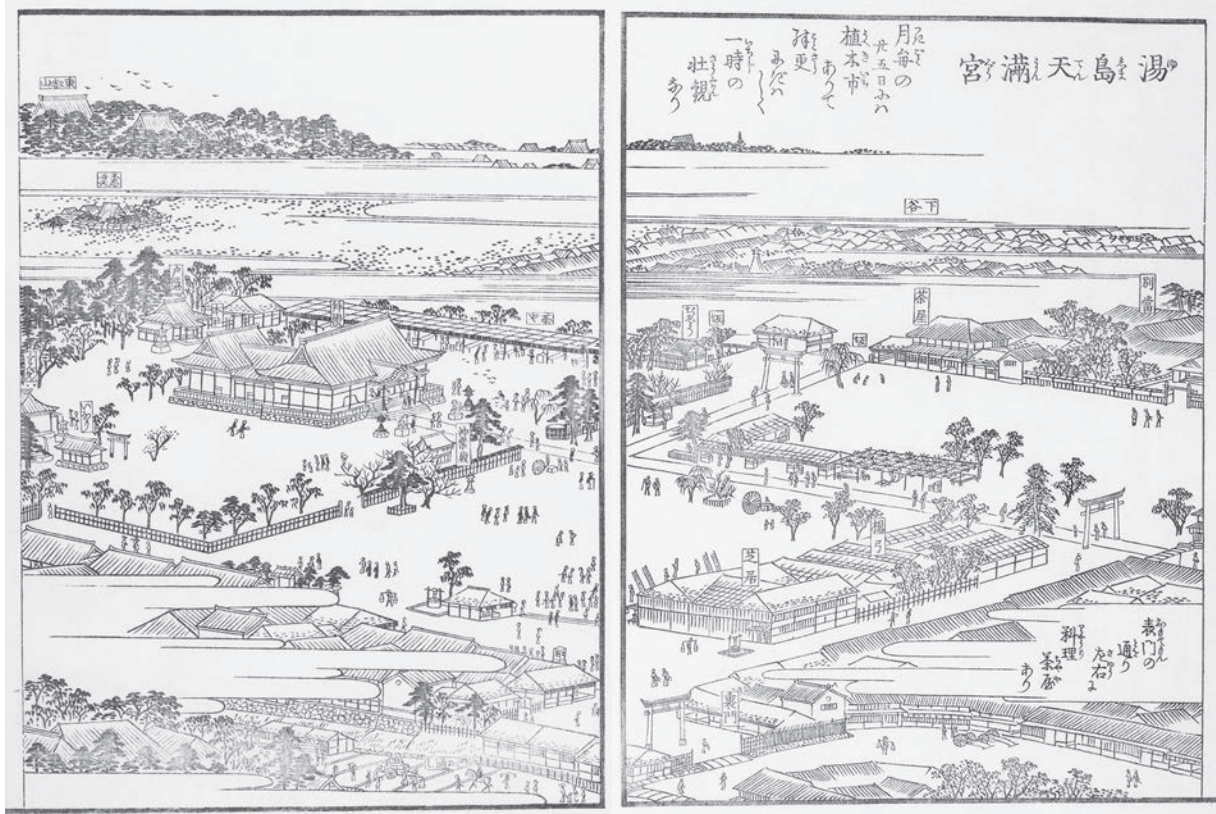


図4 湯島天神（『江戸名所図会 五』東京都江戸東京博物館所蔵 資料番号91211458）

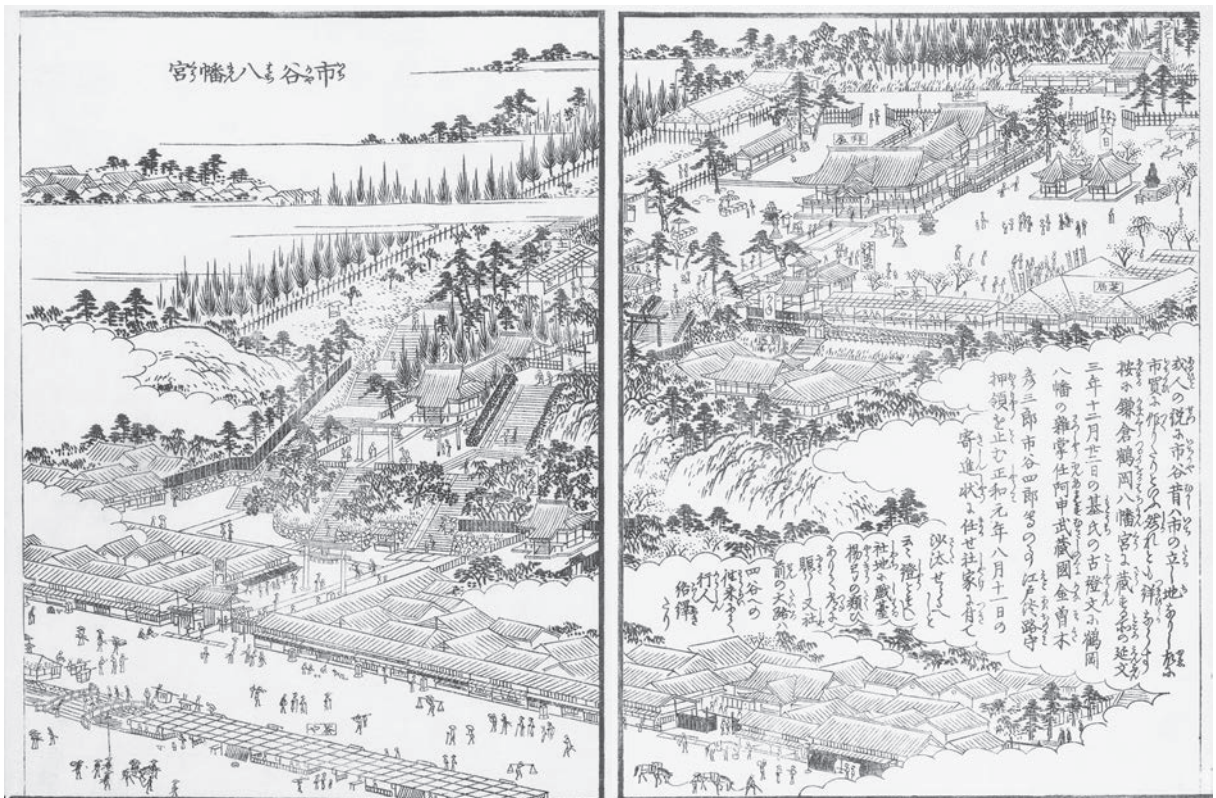


図5 市ヶ谷八幡（『江戸名所図会 四』東京都江戸東京博物館所蔵 資料番号91211457）

谷八幡である。それぞれ、境内地に芝居小屋が描かれるが、それだけでなく茶屋や楊弓も立ち並ぶ様子が見て取れる。

図6は同じく『江戸名所図会』に描かれる堺町・葺屋町、すなわち大芝居の中村座・市村座界隈の様子である。また図7は、天保改革で猿若町に移転した後の芝居町の様子である。大芝居の周辺にももちろん芝居茶屋やその他の店があったのだが、人々は大芝居そのものを観にやってくるのであり、ここに、楊弓や吹矢といったほかの娯楽の要素は求められていない。

一方で、宮地芝居は、寺社境内における人々の楽しみの中に存在していた。宮地芝居が目当てでやってくる人々もいただろうが、寺社境内には宮地芝居以外にも人々の集まる目的となるものが存在していたのであり、そこが、大芝居のある芝居町との大きな違いであったと言える。境内のほかの娯楽との相乗効果で、宮地芝居は人々の楽しみを生み出していたのである。

おわりに

さきにも述べたように、天保改革以後は、芝神明における宮地芝居の興行が資料にみえない。明治初年に、『江戸名所図会』の著者でもある斎藤月岑が、東京府知事の諮問に答えた「百戯述略」には、「宮芝居と申候は、芝神明、浅草寺地中等にて、近來興行いたし候事と奉存候」²⁴⁾とあり、同じく斎藤月岑著『武江年表』の明治3年2月の項に「芝神明宮境内、芝居を始（間も無く止）」とある。このように明

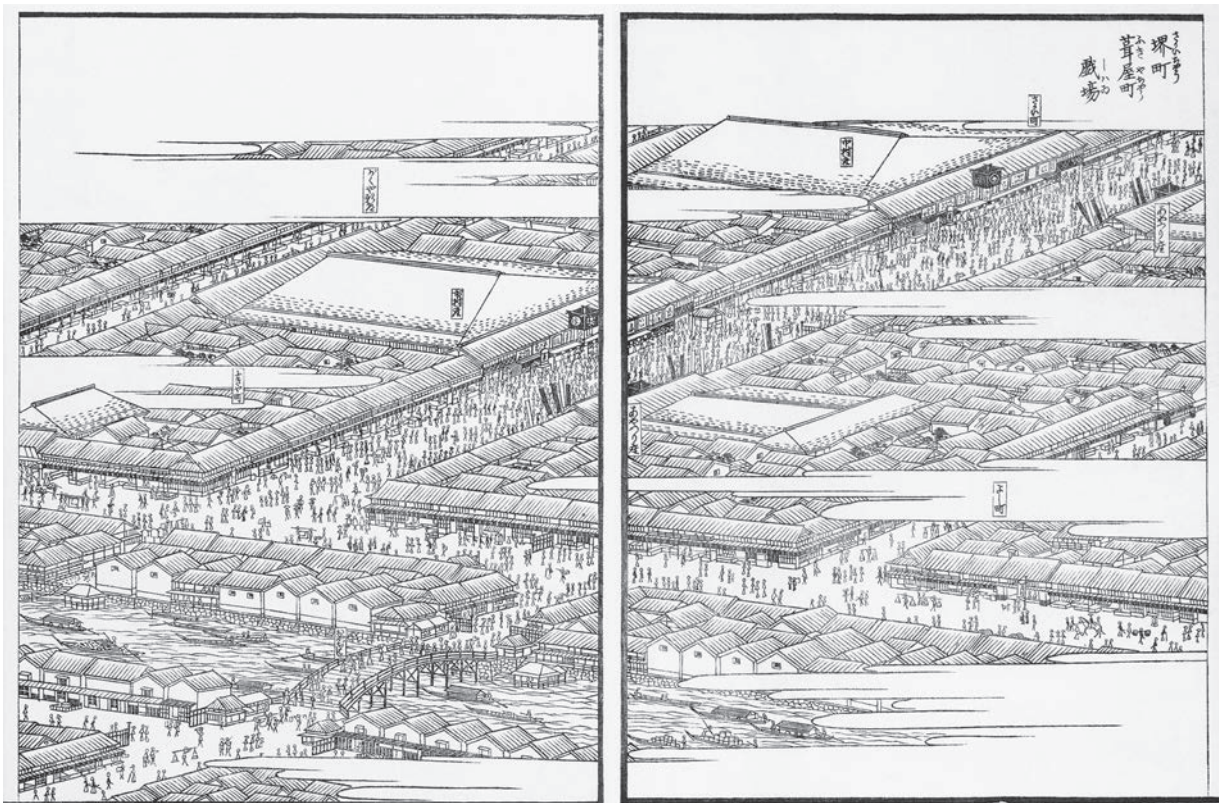


図6 堺町葺屋町芝居（『江戸名所図会 二』東京都江戸東京博物館所蔵 資料番号91211455）

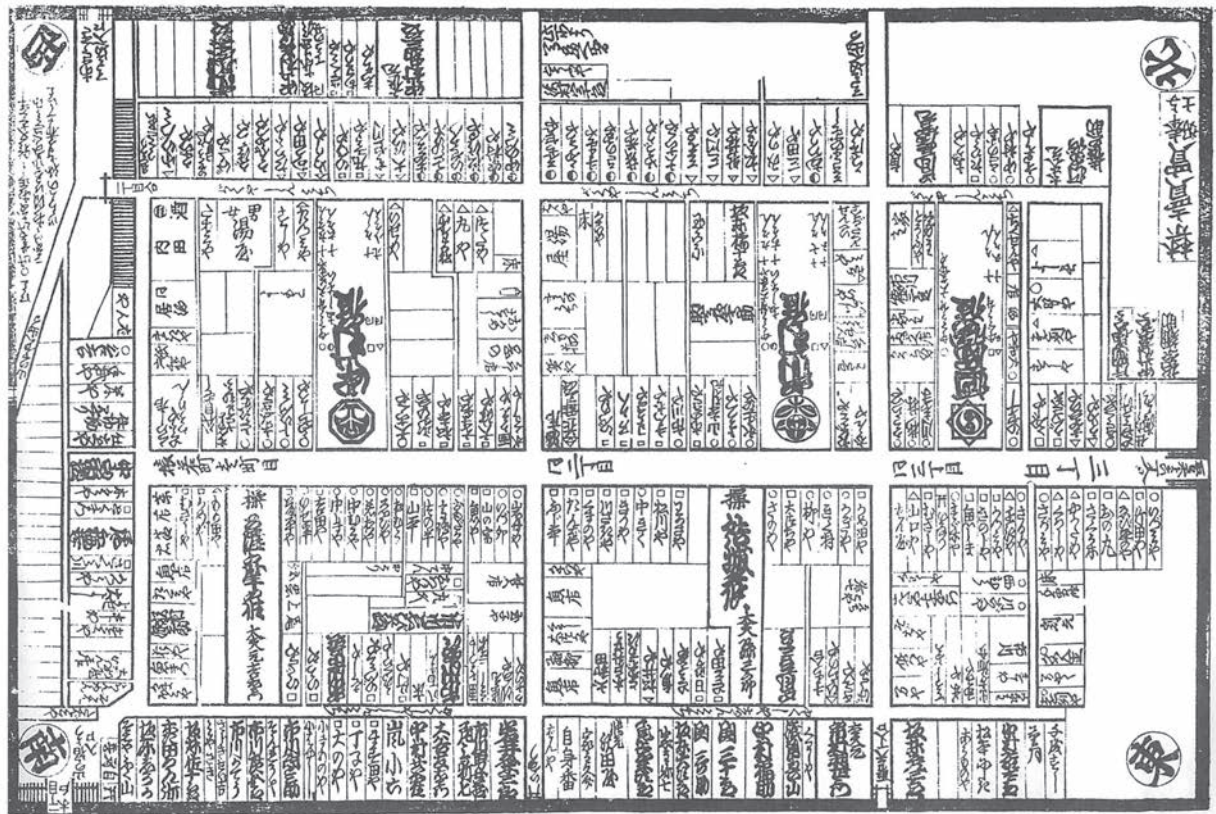


図7 「猿若街細鑑」(古板江戸図集成刊行会編『古板江戸図集成 第5巻』中央公論美術出版、2001年 所収)

治の初め頃、興行があった痕跡を見出すだけである。

なぜ、三座の宮芝居のうち、天保改革以後、芝神明と市ヶ谷八幡では興行の記録が見出せなくなったのか。今後資料を得られる可能性もあるが、もし実際に天保改革後に興行が行われなかったとしたら、それはなぜなのか。

ここまででみたように、天保改革後の幕府による厳しい取締や、出願しても許可されないという状況があったことが考えられる。ただし、同じ三座の宮芝居のうち、湯島天神では興行が行われているのであり、明暗を分けたものが何なのか、いまだ不明である。²⁵⁾

さきにみたように、芝神明では幕末に至るまで願書が出されているのであり、宮地芝居の再興を願う動きがなかったわけではない。古くからの由緒を主張する江戸七太夫の名前は、幕末に至っても芝神明境内において土地の人が誇るものの一つであったのではないだろうか。

宮地芝居は、境内のほかの娯楽とも相まって、人々を寺社境内に集める大きな要素であった。芝神明という場所に、天保改革以後宮地芝居が無くなってしまったとしたら、遊樂の地としての芝神明は天保改革以前とはかなり様相の異なるものになっただろう。江戸七太夫座は興行と休業を繰り返し、結果的に一過性の娯樂の場というあり方をついに脱することはできなかった。そこに幕府に認められた大芝居とは異なる、宮地芝居の手軽さと、哀しさがみてとれる。

註

- 1) 須山章信『江戸後期上方劇壇の研究』（おうふう、2005年）など参照。
- 2) たとえば、幕末に寺社奉行が宮地芝居の検分を行う際の注意点として、櫓、せり出しや廻り舞台を設置してはならないことなど、小屋の構造について細かく決められている。拙著『歌舞伎の幕末・明治』第一章第三節「幕末の小芝居」に詳しく述べた。
- 3) 守屋毅『近世芸能興行史の研究』（弘文堂、1985年）174-177頁。小笠原恭子『都市と劇場一中 近世の鎮魂・遊楽・権力一』（平凡社選書、1992年）142頁参照。
- 4) 芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』別巻（三一書房、1978年）所収のものによる。
- 5) 三弥井書店刊の影印による。
- 6) 「寺社書上」（国立国会図書館所蔵、旧幕府引継書）。
- 7) 同じ書上には斎藤八尾八の小屋のほか、「京屋平兵衛家業場小屋」や「市郎兵衛家業小屋場」についても記されるが、これらは当時休座あるいは小屋が潰れていたという。
- 8) 「御府内備考続編」は、朝倉治彦解説『御府内寺社備考』（名著出版、1986-87年）による。
- 9) 神田明神の都伝内が、大芝居中村座が興行出来ないときに代わりに興行を行う控櫓の都座の都伝内だとすると、これらの宮地芝居の座の中には、大芝居の代替ともなる興行権を持つ者がいて宮地を離れた可能性があるが、詳細は不明である。
- 10) 太鼓櫓は興行権の象徴である櫓と同じものであると考える。前掲『歌舞伎の幕末・明治』63頁注（12）参照。
- 11) 「御府内寺社境内取斗方之儀申上候書付／松平和泉守」（国立国会図書館所蔵、旧幕府引継書「市中取締類集 香具手踊之部」所収）。
- 12) 乞胸の件がどういう指令を受けたかはっきり見いだせない。なお、浅草寺地中の芝居は例外扱いを受けている。
- 13) なお、川柳で詠まれた宮地芝居は、そのみすぼらしさが強調されている（小池章太郎『増補/新訂』考証江戸歌舞伎 三樹書房、1997年）。たとえば「宮芝居勅使の出るもむぼくにて」（宝暦11年）や、「宮芝居むしろ破りをうるさがり」（安永8年）といった句である。前者は、宮芝居に勅使の役が出て、役者の人数が足りないので従者役の者がいない、といった意味、後者は、宮芝居の小屋の囲いの破れから芝居を覗く客を観客がいやがる、といった意味である。特に庭囲いの破れがあるという後者の句は、天保改革直前の三座の宮芝居の姿とは一致しておらず、宮芝居にもいろいろなものがあったと想像される。小池氏は、「宮芝居の観客層は、川柳作者の階層やその享受層とは、多く無縁であったらしく、そのお粗末な芝居作りに対しては、冷淡かつ嘲笑的な句のみが作られている」と述べる（同書28頁）。
- 14) 板谷徹『『祠部職掌類聚』 卷八「開帳願差免留」抄一元禄・享保の宮地芝居資料一』（『近松論集』第7集、1978年）による。
- 15) 「市中取締書留」文久十ノ百五十六（国立国会図書館所蔵、「旧幕府引継書」）。
- 16) 表3にみえず表1にある記録としては延宝8、元禄5、寛延2年のものがある。気になるのは、延宝8年の芝神明社における七太夫の興行が浄瑠璃と記されている点である。これが江戸七太夫ならば、七太夫は浄瑠璃興行も行ったものか。元禄5年の天満七太夫と江戸七太夫との関係は不明。寛延2年の記録は表3の寛延3年のものと内容が似ており、いずれにしる江戸七太夫が正式な歌舞伎芝居の興行を出願していることになる。
- 17) 引用は『歌舞伎評判記集成』第一期第九卷（岩波書店、1976年）による。
- 18) 佐藤要人編集『川柳 江戸の遊び』国文学解釈と鑑賞12月臨時増刊号、1975年。

- 19) 「長太夫の戯場」は、笹屋長十郎の芝居を指すか。なお、松金屋が料亭であることは、『江戸買物独案内』（文政7年〔1824〕刊）による。
- 20) 前掲『川柳 江戸の遊び』による。楊弓場で働く女性には密かに売色する者もいたという。
- 21) 棚橋正博・村田裕司編『絵でよむ江戸のくらし風俗大事典』（柏書房、2004年）に「盛り場の楊弓場」として載り、解説がある。
- 22) 『芝大神宮誌』（芝大神宮社務所、1942）にも「即ち境内に設けられた数多い茶屋・楊弓場、さては芝居・角力・手妻・軽業・剣術・捕手棒遣はじめ種々の見世物・富籤等の興行は当時の人人にとつては唯一の慰安娯楽とせられたものであつた」とある。
- 23) 芝神明の芝居小屋の大道具は次のように指定される。

本舞台四間こけら屋根、前側板羽目の芝居小屋、真中三尺の入り口、此左右木戸番の台、下手四尺程の入口、これに客留の札を張り、やはり番人の台、軒下に横長の絵の一枚看板、入口の脇千本桜の大名題、下手ワキ狂言何々と記したる^{いぼ}庵り、下手九尺の出茶屋、てうじといふ掛行灯、軒口に役者の紋附し団子提灯、茶道具よろしく、床几に毛氈をかけ、上下桜の立木、すべて神明地内、宮芝居前の体。

ここに見るように、小屋は柿葺板囲の常設の体裁である。宮地芝居では、筵囲いの仮設の体裁と、このような常設の形とが入れ替わり立ち替わりあらわれていたと想像する。本稿では、『神明恵和合取組』の引用は『日本戯曲全集』32巻河竹新七及竹柴其水集（春陽堂、1929年）による。

- 24) 引用は『新燕石十種』第三（国書刊行会、1913年）による。
- 25) 天保改革後、江戸の陰間屋はほとんど取り払われたが、湯島はほどなく復活し、明治直前まで営業していたという（『江戸学事典』佐藤要人執筆「芳町」、弘文堂、1994）。陰間屋の動向と宮地芝居との関係が気になるが、今後の課題としたい。

〔付記〕引用した資料は、ふりがなを適宜省略し、句読点を補った。